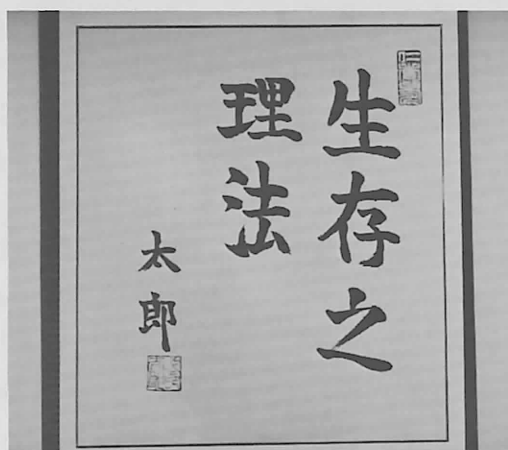


# 生存科学研究所

# ニュース

Vol.3. No.4.

1988.7.10発行



## 目次

- |                                       |                                     |
|---------------------------------------|-------------------------------------|
| ● 巻頭言 ..... 中村 元... 1                 | ● ニュース・オブ・ニュース.....11               |
| ● 兵庫県生存科学研究組織設立に関する調査研究..... 2        | ● 公益信託武見記念生存科学研究基金ニュース.....12       |
| ● 「生存の質」シリーズI-「生存の質を考える研究会」報告 ..... 4 | ● 第40回生存科学研究会のお知らせ.....13           |
| ● 昭和63年度第1回理事会..... 6                 | ● ハーバード大学公衆衛生大学院武見講座活動報告 .....14    |
| ● 生存科学ビューポイント「寸鉄医言と生存科学」..... 6       | ● ハーバード大学公衆衛生大学院武見講座出版物の御案内 .....15 |
| ● エッセイズ・キュート「真の国際金融都市の条件」... 8        | ● 武見記念論文集・資料集についての御案内(予約募集) .....17 |
| ● 維持会員だより..... 8                      | ● 編集後記.....18                       |

発行：財団法人 生存科学研究所

〒104 東京都中央区銀座4-5-1

聖書館ビル303

電話 03-563-3518

東方学院院長・武見記念生存科学研究基金顧問 中村 元

自然から乖離したものとして人間が生存し得るであろうか？ この疑問に答えるために、ドイツのニーダーザクセン州政府が主催して「精神と自然」(Geist und Natur)という国際学術会議が、1988年5月21～27日にわたってハンノーヴァー州で開かれた。それには世界じゅうから、医学者、物理学者、哲学者など66人が招待され、日本からは渡辺慧氏とわたくしとが講演した。

その会議開会式におけるニーダーザクセン州首相Ernst Albrecht博士の開会式辞には、注目すべき発言があるので、ここにその一部を紹介しよう。

\* \* \* \*

〈精神と自然〉というテーマはここ数世紀来、緊急焦眉の問題となっている。

…(中間略)…

〈精神と自然〉を主題とする一つの国際会議を開催するように、ニーダーザクセン州財団に提議したときに、わたくしは次の見解から出発した。

哲学と自然科学、また宗教と自然科学は、再び向い合うように動くということである。これは決して平凡なことではない。なんとすれば、19世紀および20世紀初めには、宗教的経験、哲学的思索、自然科学的認識はますます距っていくように見えた。ところが相対性理論と量子論物理学とは、ここで最初の方向転換をもたらした。

今日では重要な哲学的衝撃は、まさに近代

科学から発するのである。自然科学的認識は近日においては、高度に哲学的な認識、または哲学的に関連ある認識なのである。そして自然科学と哲学と宗教とのあいだの乖離は少くとも克服されて行く萌しが現れているように見える。

それ故に、われわれは、種々異なった大陸の指導的な科学者たちに請うて、公衆のための公開講演と対話において、諸認識の立脚地がいかなるものであるかを明確にしてもらおうと思った。

第二に、近年、自然に対するわれわれの立場、自然界における人間の立場についてのわれらの視野が深刻に変化した。諸の自然科学の生んだ子である近代技術は、われらに次のことを教えてくれた——われらは、自然についての古典的な直線的観念で用が足りるのではなくて、唯一性と多様性、精神と自然との関係を通して進んで行く一つの道を見出さねばならぬということである。

技術的に生成変化してゆく世界における諸の自然科学、精神科学、社会科学は、今日では十分に洞察せねばならなくなっているのが、今や哲学的な思慮が必要となり、この任務の達成は個々の自然科学と対談することによってのみやって行けるのであるということ哲学自身が知っているのである。

今日では自然科学者たちや哲学者たちだけが考えていることではないが、自然は、もはや人間にとっての他者として理解されること

はできない。また精神は、自然にとって単なる他者として理解されることはできない。この諸関係の網 (Beziehungsgeflecht) を「自己組織」(Selbstorganisation)として「高度にフィード・バックされた組織」(hochrückgekoppeltes System)、人間の思考と行動が人間外の自然との合奏として考えようとする、多重層的な理論的企図のうちに、新たな努力が表現されるのである。

最後に、全く実践的な経験であるが、世界はわれわれに対して外的なものとして立向っている客観的現実ではなくて、われわれをも、またわれらの客観的領域をも包括している一体者なのである。わたくしはここで実践的な「経験」といったが、それは、ここでは、単なる理論が問題となっているのではないからである。われわれが技術を以て世界をつくり変えたその影響は、事実として把握され得る。その事実、いかに不愉快なものであろうとも、自然の一体性 (Einheit) を、われわれに確

信させるものである。自然と精神との連関として露呈するところのものは、われわれに関連する領域においては、技術であるということは、疑いない。

当然のことながら、万人に喚起されている経済的危機、人間が自分のつくり出した所産に委ねられてしまっていること、自然を隷属させ搾取したために却って自然から反撃されていること、われわれが「責任の原理」に留意せざるを得なくなっていること——これらすべては、われわれがいまじつくりと思慮する必要があるということを示している。

それ故に、われわれは〈精神と自然〉との連関を問題とするのである。

\* \* \* \*

この会議では、新しき精神を求めて、キリスト教の瞑想、日本の坐禅、チベットの瞑想などの実修も行われたが、日本の坐禅には百人以上の参加者のあったことを付言しておこう。

### ●第39回生存科学研究会—生存科学研究所受託研究報告

#### 兵庫県の生存科学研究所設立に関する調査研究

5月21日(土)午後2時から、大手町、農協ビルで開催された第39回生存科学研究会において、生存科学研究所が、兵庫県から委託を受けて研究した「兵庫県の生存科学研究所設立に関する調査研究」の報告が行なわれた。

この研究は、当時の坂井兵庫県知事と、故武見太郎博士とのお話しから始まったもので、兵庫県が県の西播磨地区に作るテクノポリスに、生存科学の発想を生かす研究組織を作ろうということから、そのあり方についての調査研究を、生存科学研究所が、産業医科大学

土屋健三郎学長と姫路工業大学角戸正夫学長(当時)を監査委員に、産業医科大学大久保利晃教授を委員長とした委員会を作って研究したものである。報告者は、委員長の久久保利晃教授(環境疫学)で、報告の概要は以下のとおり。

\* \* \* \*

研究のための委員会は、監査委員は別として、委員長以下10名、内一人が姫路工業大学、他は産業医科大学関係者、内、医学部出身者は3名、他は他の学部出身者。

委員は、生存倫理、生存からみた教育論、産業の高度化と生存の関係、生活の多様化と生存の関係、資源の有効利用と配分、人口問題と制御、環境管理と環境計画、都市および農村対策、産業立地計画、健康管理システム等の領域について分担を決め、1年半にわたり、以下のように各分野の専門家からの話を聞き、その結果から研究組織のあり方をまとめた。

「生存からみた教育論」大阪教育大学 鈴木善自先生／「途上国での経験からみた生存科学」滋賀県琵琶湖研究所 中村正久先生／「兵庫県の生存科学研究組織のマスタープラン」大阪大学社会経済研究所 筑井甚吉先生／「兵庫県の公衆衛生、医療の現状からみた生存科学研究組織のあり方と、問題について」前兵庫県公害研究所長 渡辺弘先生・県立姫路病院院長 松浦覚先生／「産業立地論」日本大学生産工学部 笹生仁先生／「現在計画中の理学部設置構想について」姫路工業大学学長 角戸正夫先生／「生態学」早稲田大学人間科学部人間基礎科学科 大島康行先生／「6 GeV・SR計画について」姫路工業大学工学基礎研究所 安岡則武先生

また委員会は以下のように現地視察および関連研究所訪問をおこない、報告書作成の参考とした。

- ・西播磨テクノポリス予定地
  - ・兵庫県衛生研究所
  - ・兵庫県立中央農業技術センター
  - ・日本臓器製薬株式会社生物活性科学研究所
- こうして作成された研究報告書は、生存科学研究所から兵庫県に提出された。その内容を簡単に紹介すると、

第1章は、生存科学そのものについて研究

した内容のレポートで、研究所として持つべき具体的な研究課題と、設定すべき研究目標を結論として出した。

第2章は、西播磨テクノポリスに生存科学研究組織を設置した時のメリットをまとめたものである。

テクノポリス計画の基本理念は、産・学・住がバランスよく有機的に結合され、地域の豊かな伝統と美しい自然のなかに先端技術産業の活力が導入された、技術と文化に根ざす新しい『まちづくり』の構想である。しかし、数多くあるテクノポリス計画のなかで「人間中心」のまちづくりを掲げているのはこの西播磨地区と吉備高原地区の2地域のみである。我々はこれに注目し、そこに生存科学研究組織を誘致した場合のメリットは、先端技術が人間の生存に関わる影響の評価を支援できることである。(このような研究機関は、我が国のテクノポリス構想のなかには含まれていない)。これがなければ、西播磨テクノポリスの提唱する「グリーン・シャワー／人間中心の科学技術都市」は単なるスローガンに終わってしまう。参入した企業にたいして、新しく開発される技術を、生存面から予め評価を加えるというような開発方式を提唱することができるのであれば、世界的にユニークなテクノポリスとなり、使った予算は十分に還元されるであろう、と結論した。

第3章では、具体的な研究目標をまとめた。

- (1) 人間生存の立場から、将来の人間社会のあるべき姿を予見的にとらえ、学際的に研究するユニークな研究組織とする。
- (2) 生存科学研究を地域社会で展開できるような応用研究を学際的に実施し、地域開発にたいし、生存科学の立場から政策コンサルテーションを行な

いう研究組織とする。(3) 従来の専門分野を越えて、生存科学という学際的な立場から、評価ができ、インテグレーションの機能をもつ研究組織とする。(4) 研究組織のなかに教育の機能を発揮できるようにし、将来高度の基礎的、応用的能力をもつ人材の養成を計る。

第4章では、具体的な研究課題をまとめた。(1) 生存科学理論に関する研究 (2) 人間の生態学に関する研究 (3) 資源・環境計画に関する研究 (4) 技術論・産業生態学論に関する研究 (5) 健康科学に関する研究 (6) 国際関係に関する研究 (7) 生存科学教育に関する研究

第5章では、研究組織の設置主体について論じた。(1) 県立の研究所は、人的交流がむつ

かしく、また、行政目的に合う課題研究に終わりがちである。(2) 第3セクターによる研究所は、予算面、人事面とも、県立と似た制約がある。(3) 民間研究所にしたときは、採算性という財政面の困難と、人事の交流の困難とが目に見えている。(4) 大学研究所という形では、教育の面、人事の面、協同研究の面等でのメリットが大きい。委員会ではこの形が望ましいと考えた。

第6章では、より具体的に学際的研究のあり方について論じている。

最後に、これは生存科学研究所の報告書であり、兵庫県の意見を表明したものではない点を、念のため申し添える。

### ●第39回生存科学研究会—「生存の質」シリーズ I

#### 「生存の質を考える研究会」の報告

5月21日(土)、第39回生存科学研究会において、今年度の研究テーマ「生存の質」に関する第1回の講演がおこなわれ、産業医科大学教授(医学概論)伊藤幸郎先生から、本年2月産業医科大学で開催された「生存の質を考える研究会」についての報告がなされ、「生存の質」についての討議の口火が切られた。伊藤先生による報告の概要は以下のとおり。

\* \* \* \*

産業医科大学は昭和61年12月に、「バイオエシックスを考える研究会」を開催した。基調講演で、上智大学生命科学研究所長青木清教授は、最近の分子生物学の成果をふまえて、地球上の全生命の繁栄なくしては人間の生存も計れないが、これに対応する生命倫理の発達が遅れていることを強調され、北里大学付属病院院長坂上正道教授は、同大学で行なわれ

た日米バイオエシックス・シンポジウムの内容を紹介された。追加討論で、千葉大学名誉教授川喜田愛郎先生は、「バイオエシックスのとらえ方には、分子生物学的なもの、医療面からのもの、生存の立場からのもの等、幾通りかあって議論を混乱させており、これを整理しないままに研究会を開いても問題が拡散するばかりなので、具体的な各論的問題を順々に取りあげて行く可きだ」と指摘された。

そこで土屋学長の発案で、今回は前回と視点を変えて、「生存の質 (Quality of Life) を考える研究会」が企画された。Quality of Lifeという言葉は最近専らターミナル・ケアとの関連で末期患者の生命の質という意味で使われているようであるが、R・デュボスがはじめて提唱したQuality of Lifeは本来全ての健康な人間にも適用されるべき概念であり、

また、ポッター以来、バイオエシックスは生存 (Survival) の倫理とも呼ばれている。生存 (Survival) という単なる生命の量的延長、生き残りを指すと誤解される場合があり、「生存の質」としてのQuality of Lifeの方が、より解り易い概念として人間の幸福の指標となるものと考えられる。今回は、この生存の質を如何にとらえ、人間のよりよき未来を如何に作りあげて行くかについて、医学、自然科学のみならず、社会科学、宗教、哲学の各分野の方を交えて討論した。

当日の議論には大きくわけて3つの綱引きがあった。一つは宗教的見方と科学的見方、二番目は一人称と三人称つまり自分にとっての質と他人から見たときの質、三番目は個人にとっての質と社会全体にとっての質という綱引きである。

最初の発言者、東京大学名誉教授 (インド哲学) 玉城康四郎先生は、「質はアンメジューブル (測定不可能) なものである。これから述べることはその測定不可能なものについてであり、どこまで納得していただけるか解らないが、私自身にとっては既にアクチュアルプルーフ (現実の事実) として実証されていることである。現在の科学と相容れないという考えは強いが、自ら人類はこの方向——同一の世界——にいくという気持を持っている。」と前置きして、対象認識による分析的思考・自然科学的思考 (対象的思惟) とは異なる「全人格的思惟」を説明。さらにこれを全人格体が一つになって営む行為として、むしろ全人格的営為であるとし、それにより『いのち』が自ら開かれる、それが西洋の聖者たちが目指した「目覚め」であり、仏教で言う「解脱」であると言われた。

次の発言者、九州大学名誉教授 (心身医学) 池見酉次郎先生は、ターミナル・ケアの時だけ生命の尊厳とか人間を大事にという考え方はむしろ逆転していることであって、普段からの日常の診療でそういうことを考えることが大切である。ターミナル・ケアでだけ生命の質が言われるのは、言葉だけの先行であり、人間として生きることを意味を全うすることが生存の質を高めることである、と言われた。

第三番目の話題提供者として発言された北里大学教授 (法学) 唄孝一先生は、意識が有るのか無いのか解らないような患者の場合に、生命の質を他人が言うのは、本人の意志が無視される恐れがあり、それが進めばナチ・ドイツと同じ差別につながる、と警告された。

このほか、江見康一先生 (経済学) は、集団としての生存の質、環境との関わりも考えられるとし、無限に繁栄するということが限界に近付いた場合、拡大推進するという時代はそろそろ終わりを告げて、人間の知恵を制御し、枯渇する資源を温存し生態系を守ることが生存の質を考えることである、と言われた。

種としての生存を考えた場合、健康ということが一番基本になるという意見もあったが、健康感という個人的なことが大切であり、他人への生存の質の押し付けは駄目であり、結局個人の自覚と全体とのバランスが何であるかが問題となると議論された。

\* \* \* \*

生存科学研究会における伊藤先生の報告後の討議では、(人間、労働)、(自然、資源)、(哲学、宗教)、(経済、社会、法律)、(科学、技術)、の相互関係のなかで、経済の再生産から生命の再生産への視点の変更の必要が強調さ

れ、また、生存不可能な道は合意されないであろうが、生存可能な道には色々な可能性があり得ること、質は価値観に関係するから、政策に結び付く場合には注意を要することが強調された。

\* \* \* \*

#### 新規加入生存科学研究会員

伊藤 幸郎	卜部 文麿	大久保利晃
大林 雅之	奥村 集	加藤 邦夫
藤井 義顕	丸井 英二	

## 第 1 回 理 事 会 ・ 評 議 員 会 合 同 会 議

昭和63年度第1回理事会、評議員会は基金の運営委員会とも合同で、昭和63年5月27日(金)午後2時から、研究所会議室において開催された。会議は熊谷副理事長(財団)兼運営委員長(基金)が座長を務め、先ず昭和62年度事業報告、同収支決算が報告・説明され、評議員会により審議され、理事会において承認された。次いで昭和63年3月26日付けの当財団の試験研究法人としての認可の継続が報告され、また各担当理事より、7月1日から3日迄開催される第3回武見国際シンポジウムの準備状況の説明ならびに、昭和62年度第

3回理事会において承認されている、昭和63年度事業計画についての準備状況と抱負が述べられた。

なお、決算書による昭和62年度収入総額は、基本財産運用収入35,670,731円、継続寄付金収入12,830,000円、基本財産収入256,068,000円を含め総額488,480,569円であり、支出は、一般事業費6,173,302円、ハーバード武見講座特別事業費49,822,474円、受託事業費14,631,090円、基本財産への繰り入れである固定資産取得支出318,700,000円で、収出合計437,274,824円である。

### ●生存科学ビュー・ポイント

## 寸 鉄 医 言 と 生 存 科 学

### 亀井クリニック神経科内科診療所・生存科学研究所理事 亀井康一郎

世に伝う武見語録の中には、出所、出典、日時が明確なものと、不明確なものがある。これらの語録は、ジャーナリズムの虚構的報道によって戯画化され、武見太郎の実像が、歪曲された場合が屢々であった。しかし、武見先生にとっては全く取るに足らぬことであった。先生のスケールは桁違いに大きかったからである。一方、武見先生から批判された小者にとっては、その言葉は延々と伝承され尾緒がついてゆくのである。

例えば、出所不明確の語録に属するが、先生は、精神科医及び精神病院経営者を“下宿屋の亭主”“牧畜業者”と評されたことがある。これは今でもわれわれ精神医療界の語り草になっているが、それ程に核心を衝いた的確な言葉であったからである。勿論、その言葉の意味は、悪い意味において的確であった。

“下宿屋の亭主”の中には親切に下宿人の面倒をみ、便宜を計り、いたずらに賃上げを

要求せず、下宿人が将来立派な社会人になれば、わがことのように喜ぶという亭主もいるであろう。“牧畜業者”の中にも、馬や牛や豚を愛情をもって育て、環境の清潔さに心掛け、飼料の配合や病気の予防に心を砕き、やがてそれらの動物が、ダービーで勝利を得、搾乳量で日本一を誇り、食肉の供給量で市価を下げることを願って養育しているかも知れぬ。このような“下宿屋の亭主”や“牧畜業者”は、むしろ社会的になくはならぬ存在である。

武見先生の言われたのは、サービスもせずに賃上げだけを要求する下宿屋の亭主、ろくな飼料も与えずに飼育した動物を高く売ろうとする牧畜業者のことを言われたに違いない。精神病院の場合、もっと悪いことに、社会への適応性を欠くという理由で、病院の中に一生いる人、或いは病院から出られない人がいる。これは飼料を与えられて一生牧場の柵の中をうろついている動物に近似しており、そのような動物がいるだけで、牧場主には上がりが入ってくるというわけで、これは将に、精神病院の一面を鋭く抉った寸鉄医言と言えよう。

3年前に生じた報徳会宇都宮病院の患者リンチ事件以来、俄かにわが国の精神医療及びその法律が、国際間で問題視されるようになり、各関連団体の論議を経て、昨年9月、精神保健法が国会で成立、今年7月より、従来の精神衛生法に代って施行されることになった。その改正の要点は、精神病院の入退院に際し、如何にすれば患者の人権を守ることができるか、患者を病院に閉じ込めておくのではなく、如何に開放的に——普通病院と同様に——扱うか、又患者が社会復帰をするため

のリハビリテーション手技を強力に押し進めなければならないこと、地方自治体は、このような患者のために、生活訓練施設、授産施設を設置することが出来る——未だ義務規定ではない——等がその主旨である。

基盤に流れる精神医療の考え方は、凡て肯定できるのであるが、現場で精神患者を扱う立場になるとさまざまな問題点が出てくる。その最大なるものは、精神患者を扱うに当って、大学病院、精神病院、精神科診療所、精神保健センター、保健所精神保健相談室、等の縦横の連繋システムが、国公立の施設をひっくるめて出来上がっていないことである。この連繋システムが出来上がっていないと、精神病院から社会へ出てくる患者を、どこで、どのように受け入れ、支持してゆくのが明らかでなくなる。その結果、アメリカで見事に失敗したように、street people, bag peopleという類の精神病浮浪者が巷に溢れることになるであろう。このようになれば、再び世論の動向は、人権を重視する方向より患者を隔離する方向へと流れ、真の精神医療の在り方を見失う結果ともなりかねないのである。

武見先生は、かつて医療は、人間の生存期間の一貫保障でなければならず、その為には国民の連帯意識の高揚が必要であると言われた。これは生存科学の基本概念の一つと私は思うが、精神医療の場からみると、痛切にその必要を感じるものである。医師やその周囲の一部の組織が、小さな努力を重ねることは必要であるが、国民全体の精神医療に対する意識変革が起らない限り、宇都宮病院に代表される事件は続くであろうし、又法改正後、精神病院より出てくる患者が、無宿浮浪者と



して巷をさまよい歩くであろう。

現今、「ころの時代」が強調されるはるか以前に、精神医療の最大の問題点を僅か数語で批判された武見先生の炯眼に、改めて敬服

すると共に、「よき下宿屋の亭主」「よき牧畜業者」とは何かを省みる時代に突入したと思うのである。(63, 4, 24.)

### ●エッセイズ・キュート

#### 「真の国際金融都市の条件」

「世界の一流の金融機関であるかは、その企業が東京にオフィスをもっているかどうかで評価されてしまう」と、あるアメリカの金融機関の幹部が言ったことがある。特に証券会社にとっては、東京証券取引所の会員であることは、一流証券会社のステイタス—シンボルで、入会金は11億円で高すぎるなどと文句をいっている余地はない、ということであった。

もともと、国民の貯蓄率が10数%と非常に高いうえに、年間、800億ドル(10兆円)をこえる貿易の黒字が続いている国があれば、そのおカネのフロー(流れ)のなかにひたっていないければ、金融機関はなりたたない、という解説もあった。

とにかく、東京は急速に世界の三大金融都市の一つになり上がったことは、誰も否定出来ない事実だろう。

最近ロンドンに赴任した友人から長文の便りがきた。

「こちらにきて、一番驚いたことはシティ(ロンドン金融市場)に、働く人々の、国際情勢についての関心の高さです。日本では、日本に直接関連のある国際問題には、結構関心も強いが、ここでは、小さい国際紛争—例えばニカラガやセイロンなど小国の紛争—をも丁寧にウオッチしています。文字通り、地球をグローバルな立場から見ているという感じですよ。

さらに驚くことは、それぞれの地域について専門家がいて、これらの専門家とは簡単に接触が可能で、かなり正確な情報を教えてもらうことが出来ます。

「東京の金融マンが、世界情勢に強い関心をもつことは、時間の問題と思いますが、国際情勢の専門家が育つには、かなりの時間が必要でしょう」

要するに、カネの勢いだけでは真の国際金融都市にはなれない、ということだ。(O)

#### 維持会員だより

##### 「生存科学研究所への思い込み」

##### 私の考える生存研の原点

私がマスコミ等の通俗的フィルターを通さない武見先生の考え方に初めて接したのは、科学技術庁のライフサイエンス企画室(当時)

に異動になったときではなかったかと思えます。ライフサイエンスについて様々な専門家の考え方を読んでいた中で、武見先生の言ったことが、門外漢の私にとっては最も分かり易かったです。後日、ライフサイエンスの

概念を我が国の中に一般化したのは武見先生であったことが分かったのですが、それにしても、これまで武見先生に接したことがなかった私にとっては意外なことでした。

ところが、これには大きな落とし穴があったのです。武見先生は、ライフサイエンスを「人類生存の秩序に関する科学」と定義し、今後の人類の生存を保障するためには、生命の科学、生活の科学、生と死の哲学等を統合した新しい科学を創造する必要がある、と主張されていたのですが、この「人類生存の秩序」をブラックボックスに入れて理解していたから、分かり易かったのです。

このことに気付いたのは、職務の関係で、公益信託生存科学研究基金（当時）を認可する窓口になり、このブラックボックスの中味をのぞく機会を得たときで、愕然とさせられたわけです。再びライフサイエンスは私にとって意味不明になってしまったのです。

ところが、ところが、更に現在の生存科学研究所の設立に当たり、再び役所の窓口になったことから、このブラックボックスを、まったくの門外漢である役所の関係者に説明しなくてはならない立場になってしまったのです。

この難局に立たされた私に一定の回答を与えてくれたのが、本会設立準備会に示された設立趣意書でした。私は、生存科学を、小さくは個々の人間、大きくは人類全体が健やかに老いて死に至るための手法を、あらゆる科学技術を総動員して研究し、諸問題の解決に役立てていく超学際的性格を有した総合的科学で、前述の武見先生の言葉にある、新しい科学であると一方的に思い込んだわけです。

もちろん、生存科学の持つ巨大で深淵な領

域の一部でしかないことは、この時点でも十分承知していましたが、まったく下地のない人に説明して、理解してもらうためには、誤りのない範囲で、平易、かつ凝縮した形にしなければならぬのであります。このことは、今後本研究所の存在意義を広く理解してもらう際、すなわち、生存科学というものを公益法人として世に役立てていくためには、その意味、意義を、いわゆる一般の方々、ありていに言えば、ほとんど生存科学について下地のない人に理解させていかなければ本研究所の目的も達せられないのですから、専門家の方々から見れば多くの問題があるとは思いますが、大事なことではないかと考えます。少々役人的発想かもしれませんが、技術でも情報でも、あるいは高邁な思想でも、相手に伝わらなければ極論すれば無いのと同じであり、この点は、大学の研究室とは異なり、公益法人として考慮すべきことであろうと思います。

話しがそれてしまいましたが、この単純化した一方的思い込みは、庁内の人には非常に説得力がありました。病気を治すことよりも、かからなくするプライマリー・ケア・システムがいかにか本人のためであり、また、社会の活力に寄与するものであるか、更に、そのケアを、何才のころ、どのような内容でやっていくのが効果的、経済的であるのかの研究の重要性、その際、現在のような、見てやるから、何日、どこへ集まれ型の集団検診でなく、何才になったら、都合の良い日に、かかりつけの開業医のところに行く、もちろん保険診療であり、これらが結果的にいかに財政負担を少なくするものであるか等々……。

生存科学を矮小化しすぎるという御指摘も多いと思いますが、私にとって、これが生存

科学への一方的な思い込みであり、私なりの本研究所の原点であり、また期待でもあったわけです。

言い換えれば、生存(科学)の手法を体系化・一般化し、その結果を前述のような具体的な課題に適用して、求められている各分野の問題解決に寄与していくことが本財団の目的であり、他の多くは、そのための手段として考え方を区分していくことが重要であると思うのです。

極論すれば、目的(原点)を常に捉えおくことが大事であり、これは不動のものとし、手段は目的達成のための一手法であるから変化するものである。非難を恐れずに更に言えば、ハーバード大学関係、生命倫理や医薬品等のプロジェクト、更には公益信託で行っている武見先生の著作等の体系的整理等も、目的遂行のための手段として現在は重要なものであるが、将来、目的遂行上これらに代わるものがでてくれば、代っていくものであると考えるわけです。したがって、目的=原点によりアプローチしていく研究(手法)に、必ずしも十分でない本財団の資金を投下していく方向が大事であると思うのです。その意味で、今回打ち出した、自主研究の各プロジェクトは、今後の大事な方向であると考えており、大きな期待をしております。

生存科学という巨大な象のようなもの、言い換えれば武見先生の巨大かつ深淵な思想の全体像を一人で語る方はいないのであり、巨大な象の一部をこれまで武見先生に接してこられた方々がそれぞれ持っているのであるから、それらに関係者が持ち寄って、一日も早く、その全体像を明らかにして諸問題の解決に適用していくこと、すなわち、生存(科

学)の手法を明らかにしていくことが、本財団として今後の緊要な課題になるのではないかと考える次第です。このことが結果として、武見先生の思想を体系化することであり、理解することであり、また、後世に問うことであり、活かしていくことであると信じるものであります。

(農林水産省農蚕園芸局繭糸課 草野洋一)

### 維持会員異動・寄付者の紹介

(昭和63年4月1日～昭和63年5月31日)

#### 入会

##### ●個人

伊藤 幸郎	産業医科大学教授
大林 雅之	産業医科大学助手
加藤 邦夫	仙台市役所衛生局長
繁田 信	繁田医院院長
宍戸駿太郎	国際大学学長
杉村 隆	国立がんセンター総長
竹内 禮二	株式会社敬文堂
丸井 英二	東京大学医学部国際交流室講師

##### ●法人

金原出版(株)	三井信託銀行(株)
田辺製薬(株)	(株)ヤクルト本社
第一製薬(株)	藤沢薬品工業(株)
中外製薬(株)	福岡県医師会

#### 退会

##### ●個人

池内 哲	渡辺 淳	生駒純一郎
------	------	-------

#### 寄付

##### ●法人

アンリツ(株)	300,000円
日本電気(株)	1,000,000円
(株)明電舎	660,000円

## ニュース・オブ・ニュース

### 研究所日報

- 4月28日 昭和63年度第1回研究企画委員会  
5月7日 第3回武見国際シンポジウム実行委員会  
5月21日 昭和63年度 第1回総務委員会  
5月27日 昭和63年度 第1回理事会・評議委員会合同会議  
6月8日 '88第1回生存研小講演会  
6月9日 昭和63年度第1回広報委員会  
6月20日 第3回武見国際シンポジウム組織委・実行委員会

\* \* \* \*

### 実践的地域医療研究の準備開始

4月28日に開催された第5回研究企画委員会において、フィールドワークを伴う地域医療の実践的な研究の可能性について検討された。地域医療関係者、大学、産業界の参加を得た受託事業としての協同研究スタイルで、このような新しい研究のあり方について、生存科学研究所が参加グループの組織化に寄与できると期待される。

\* \* \* \*

### 第1回総務委員会

昭和63年5月21日午前11時から、研究所会議室において昭和63年度第1回総務委員会が開催された。今年度から、総務委員会は改組され、新しいメンバーでスタートしたが、理事会・評議委員会という組織的な会と実務の間であって、社会との窓になって、広い立場からフリーな意見を財団に注入できる場としたものである。

先ず、小平専務理事から、新しい生存科学研究体制の組織図に従って、財団と基金の連携機能の説明があった。

生存科学研究がカバーしなければならないものとして、

- [A] 1. 人間存在にかかわる哲理の研究  
2. その社会展開上の経済的裏付けの理念と手法の研究  
3. それらによる具体的包括的社会展開・そのなかの一つとしてハーバード武見講座
- [B] 1. 武見太郎全資料の編纂  
2. 武見精神の発展への貢献者への表彰と助成  
3. 意識的に作られた、皆が参加できる広い、自由な研究の場

が有るが、[A]を財団が受け持ち、[B]を基金が受け持つ。[B]の3.が生存科学研究会と、今回新たに出発するその分科会である。

次いで、財団と基金の財政状況の説明があり、さらに広報、講演・会員、研究企画等の担当からそれぞれについての説明があり、そのあと委員一同から研究の普及、研究所の広報や維持会員獲得について様々な新しいアイデアが提出された。

### 総務委員会委員名簿

専務理事 常務理事(2名) 草野洋一  
久保まち子 筑井甚吉 土屋健三郎 古澤健彦  
松田 朗 松本 洋 森重利直 山口正民

\* \* \* \*

### 大瀬貴光会員、表彰される

当財団の維持会員である前熱帯医学協会顧問

の大瀬貴光氏は長年にわたるアフリカでのマ  
ラリア撲滅への貢献により、5月26日、国際  
厚生事業功労者厚生大臣表彰を受けられた。

\* \* \* \*

#### H.H.ハイアット教授来所、小講演会を開催

6月8日(水)武見国際保健講座創設の貢献者  
H.H.ハイアット教授(前ハーバード大学公衆  
衛生大学院学部長)が生存科学研究所を訪問  
された。

研究所では、この機会にハイアット教授に  
よる小講演会を開催した。演題は、Improving  
Efficiency in the Use of Health

#### Resources

\* \* \* \*

#### 第4回広報委員会

6月9日午後4時から、第4回広報委員会  
が開催された。委員会には新しい広報委員も  
加わり、ニュースのあり方、年報または雑誌  
出版の可能性、マスメディアの利用法等、活  
発に研究所広報活動の将来について協議され  
た。

新たに広報委員に加わったのは安川正彬、  
佐藤貴一郎の両氏である。

### 公益信託武見記念生存科学研究基金ニュース

#### 基金日報

- 5月19日 第4回武見記念論文集編集委員  
会
  - 5月21日 第39回生存科学研究会
  - 5月21日 第1回生命倫理の理念と科学的  
接近研究分科会
  - 5月21日 第1回健康投資と地域医療の展  
開研究分科会
  - 5月27日 第11回運営委員会
  - 5月27日 第1回研究分科会世話人代表の  
集まり
  - 6月18日 第2回健康投資と地域医療の展  
開研究分科会
  - 6月24日 第1回基金総務委員会
  - 6月24日 昭和63年度第1回表彰・助成委員  
会
- \* \* \* \*

#### 第1回基金企画委員会

4月28日開催された第1回公益信託武見  
記念生存科学研究基金企画委員会は、新しく

設けられた組織であり、会議の冒頭、基金と  
財団の研究連携体制と、そのなかでの生存科  
学研究会の位置付けが説明され、続いて、今  
後の生存科学研究会ならびに、研究分科会の  
研究テーマ、運営等について協議された。

#### 企画委員会委員

土屋健三郎 梅園 忠 筑井甚吉  
豊川裕之 藤川正信

\* \* \* \*

#### 各種研究分科会発足

ニュース前号で紹介したように、昭和63年  
度から、生存科学に関わる色々なテーマにつ  
いてさらに掘り下げた研究を行なうために、  
生存科学研究会の分科会として各種の研究會  
が設けられることになったが、既にその幾つ  
かが発足して活動を開始した。この研究会は、  
生存科学研究会と同様、全くの手弁当による  
自主的研究会であるが、生存科学研究会のメ  
ンバーは、申し込まれれば参加することがで  
きる。研究所維持会員も生存科学研究会のメ

ンバーとなる手続きを取れば参加できる。研究所ならびに基金では、多くの方々の参加を希望している。各研究分科会は、毎回の検討を積み上げて行く方針で、それを、生存科学研究会で全体の統合を図るという形で研究を進める。

既に発足している研究分科会のメンバーを紹介する。

[生命倫理の理念と科学的接近研究分科会]

世話人：永瀬正己

会員：青木 清、岩井宏方、上原鳴夫  
梅田博道、卜部文麿、江橋節郎  
大林雅之、笠貫 宏、草野洋一  
高橋由美子、J.マシア、松田 朗  
矢島 正、山本幹夫、我妻 堯

[健康投資と地域医療の展開研究分科会]

世話人：梅園 忠

会員：相澤好治、岩井宏方、大久保修吉  
大瀬貴光、加藤邦夫、吉川 暉  
左奈田幸夫、高田 勲、田島達郎  
田村貞雄、中井暉典、馬場 甫  
原 次郎、松田 朗、弓倉藤楠

なお、今後さらにメンバーに新しい方を加えることや、新しいテーマの分科会を設けることが考えられている。

\* \* \* \*

#### 第1回運営委員会

5月27日(土)午後2時から、財団の理事会、

評議員会と合同で開催された第11回運営委員会では、基金と財団の研究の連携を重視する意味からも、基金、財団両方を通しての生存科学研究への取組が説明され、財団の評議員会、理事会が終了後ただちに運営委員会に切り替えられて議事が進められ、昭和62年度の事業報告、収支決算が審議され、全員異議なく了承された。

\* \* \* \*

#### 第1回研究分科会世話人代表の集まり

5月27日運営委員会終了後、午後4時から第1回世話人代表の集まりが開催された。各世話人代表から、分科会の抱負、計画が述べられたあと、開催日の調整、研究成果の整理等が協議された。

\* \* \* \*

#### 第39回生存科学研究会

5月27日(土)午後2時から、大手町農協ビルにおいて第39回生存科学研究会が開催された。今回は「生存の質」の年間テーマによる第1回目の会合であり、講演は、産業医科大学(医学概論)伊藤幸郎教授による「産業医科大学における『生存の質を考える研究会』に関する報告」と、同じく産業医科大学(環境疫学)大久保利晃教授による「生存科学研究所の兵庫県からの受託研究『兵庫県の生存科学研究組織設立に関する調査研究』報告書についての報告」の二つであった。(内容は本文にて紹介)

#### ●予告

### 第40回生存科学研究会のお知らせ

第40回生存科学研究会は、7月16日(土)午後2時から大手町経団連ビル901号室にて開催さ

れる。演題および、演者は下記のとおり。

[I]開発途上国の環境問題を通して考える生

存と生活

滋賀県琵琶湖研究所専門研究員

中村正久先生

[II]人類の生存における科学技術の役割—

「科学と人間の会議」の報告から

上智大学生命科学研究所所長 青木清先生

\* \* \* \*

なお、9月の第41回生存科学研究会は、都

合により「武見太郎の『生存』—その文献的考察」と「地域医療のあり方研究分科会」の報告を7月と入れ替えて行ないます。

開催日も臨時に第4土曜日の24日となります。

第41回生存科学研究会 9月24日(土)午後2時から大手町経団連ビル901号室にて開催。

## ハーバード大学公衆衛生大学院武見講座活動報告

### 〈武見研究セミナー〉

- 5月3日 Medical Lifeboat/Howard H.Hiatt

「米国医療費にみるメディコ・エコノミクス」

- 5月21日“Planning Hazardous Waste Management in Massachusetts”/Michael Brown (Director, Hazardous Waste Management Office, Commonwealth of Massachusetts)

「マサチューセッツ州の有害廃棄物管理計画」

- 5月16日“The Respiratory Health of Brickworkers in Cape Town, South Africa”/Jonny Myers

「南アフリカケープタウンの煉瓦職人の呼吸器影響（または呼吸器の状態）」

- 5月17日“Planning Malaria Control at the District Level:A Case Study in Buenaventura, Colombia”/Alberto Alzate

「地域レベルにおけるマラリアコントロール計画：コロンビア、ブエナベンツラでの事例研究」

- 5月24日“Evaluation of Politics and Strategies for the Development of Occupational Health Service in India”/Ramesh Durvasula

「インドの職業保健サービスの進展に関する政治・戦略の評価」

- 5月26日“Drug-resistant Falciparum Maralia in Africa: Policies for the Health Care System”/Allan Schapira

「アフリカの薬剤耐性ファルシパルムマラリア(マラリア原虫の一種):ヘルスケアシステムの考え方」

- 5月27日“I. Health Expenditure and Service Utilization in a Squatter Settlement” “II. Impact of a Primary Health Care Programme on Health Service Utilization in a Squatter Settlement”/Fozia Qureshi

「1. スクアッターセトルメントにおける保健費用とサービス状況」

「2. スクアッターセトルメントの保健サービスに及ぼす一次医療計画の影響」

- 6月2日“Influence of Social and Other Complicating Variables in the Occur-

rence of Occupational Diseases”/  
Kazuyuki Omae

「職業病発生に及ぼす諸要因の影響」

- 6月6日“The Role and Impact of  
External Aid in Tanzania’s Health

Developmet”/Eustace Muhondwa

「タンザニアの保健開発に対する海外援助  
の役割と影響」

(第4回武見フェロー 大前和幸)

## ハーバード大学公衆衛生大学院武見講座出版物のご案内

ハーバード大学公衆衛生大学院武見講座で  
は、下記の出版物が刊行されています。入手

ご希望の方は、実費にてお頒けします。(財)  
生存科学研究所事務局までお申し出下さい。

### Annual Reports

#### Research Papers of the Takemi Program 1985-88

- RP1 Prakash C. Gupta, "An Intervention Study of Tobacco Chewing and Smoking Habits for Primary Prevention of Oral Cancer Among 12,212 Indian Villagers," June 1985.
- RP2 Lukas Hendrata, "Beyond Alma Ata: An Analysis of the Organizational Perspectives of Primary Health Care Development in Indonesia," June 1985.
- RP3 Keiji Tanaka, "The Medical Reimbursement System in Japan: The Influence of the Point System on Resource Allocation," June 1985.
- RP4 Yeon Ha-Cheong, "Who Gains and Who Loses: An Overview of Equity and Efficiency in Korea's Health Insurance System," June 1985.
- RP5 Yuan Hong-Chang, "Strategies for the Control of Schistosomiasis japonica in the Marshland and Lake Regions of China," June 1985.
- RP6 Guy Carrin, "The Economics of Drug Financing in Sub-Saharan Africa: The Community Financing Approach," June 1896.
- RP7 Guy Carrin, "Self-Financing of Drugs in Developing Countries: The Case of the Public Pharmacy in Fianga(Chad)," June 1986.
- RP8 Mitsuru Fujii, "Cost-Effectiveness Analysis of Mass Screening as Secondary Prevention in Japan," June 1986.
- RP9 El Fatih Z. El Samani, "Nutritional and Socio-Demographic Risk Indicators of Malaria in Children Under Five: A Cross-Sectional study in a Sudanese Rural Community," June 1986.
- RP10 El Fatih Z. El Samani, "Cardiovascular Diseases Hospital Load in a Sudanese Urban Center," June 1986.
- RP11 Uriel Kitron, "Malaria, Agriculture, and Development: Lessons from Past Campaigns," June 1986.
- RP12 S. W. R. de A. Samarasinghe, "The Nature of Economic Adjustments and Their Effects on Health and Nutrition: A Case Study from the Third World--Sri Lanka," June 1986.
- RP13 Tomas Uribe-Mosquera, "Food and Nutrition Policy in Colombia: The Impact of Income



- Transfers on Energy and Nutrient Intake, "June 1986.
- RP14 Charles M. Good, "The Community in African Primary Health Care: Problems of Strengthening Participation and Proposed Complementary Strategy, "June 1987.
- RP15 Chung-Fu Lan, "Strategies for Improving the Delivery and Financing of Medical Care Services in Taiwan, "June 1987.
- RP16 Eiji Marui, "Conflicts Between Foreign Plans and Indigenous Systems : U. S. and Japanese Experience with Vital Statistics Reform in the Early Occupation Period, "June 1987.
- RP17 Kanchanasak Phonboon, "Thailand's Program on Immunization : Program Impact and Cost-Benefit Analysis, "June 1987.
- RP18 Wang Zeng-Sui, "The Interruption of Enteric Infectious Disease by Providing Deep Well Tap Water Supply in Rural Areas of China : A Cost-Effectiveness Analysis and Efficiency Evaluation, "June 1987.
- RP19 Alberto Alzate, "Planning Malaria Control at the District Level : A Case Study in Buenaventura, Colombia, "June 1988.
- RP20 Ramesh Durvasula, "The Development of Occupational Health Services in India : Issues of Inequity and Problems of Regulation, "June 1988.
- RP21 Ramesh Durvasula, "The Hazards of Work in the Formal Sector in India : Validity of Occupational Disease Detection and Reporting, "June 1988.
- RP22 Emmanuel Max, "Economics and Management of Health : The Case of Leprosy Control, " January 1988.
- RP23 Emmanuel Max, "Productivity Loss Due to Deformity from Leprosy in India, "January 1988.
- RP24 Eustace Muhondwa, "The Role and impact of External Aid in Tanzania's Health Development, " June 1988.
- RP25 Jonathan E. Myers, "The Sociologic Context of Occupational Health in South Africa, "June 1988.
- RP26 Jonathan E. Myers, "The Respiratory Health of Brickworkers in Cape Town, South Africa, " June 1988.
- RP27 Kazuyuki Omae, "Influence of Social and Other Complicating Variables on the Occurrence of Occupational Diseases : A Case Study in One Japanese Factory, "June 1988.
- RP28 Asma Fozia Qureshi, "Health Expenditures and Services Utilization in a Squatter Settlement, "June 1988.
- RP29 Asma Fozia Qureshi, "Impact of a Primary Health Care Program on Health Services Utilization in a Squatter Settlement, "June 1988.
- RP30 Allan Schapira, "Policies for Resistant Malaria and the Health Care System : A Course Module, "June 1988.
- RP31 Allan Schapira, "The Resistance of Plasmodium Falciparum in Africa to 4-Aminoquinolines and Antifolates, "June 1988.
- RP32 Allan Schapira, "Longitudinal Study of Malaria in Maputo, Mozambique, 1986-88, "June 1988.
- RP33 Allan Schapira, "The Challenge of Chloroquine Resistant Malaria to Health Services in Africa : Epidemiological, Economic and Operational Aspects, "June 1988.

## Discussion Papers

- DP1 David Banta, "The Role of Medical Technology in Developing Countries, "March 1984.
- DP2 Lincoln Chen, "Interactions of Health Technology and Social Organization, "March 1984.
- DP3 Donald Hopkins, "Review of CDC Activities and Initiatives in International Health, "March 1984.
- DP4 T. Scarlett Epstein, "Even Women Have to Eat : Nutritional Problems of Third World Women," November 1984.
- DP5 Vicente Navarro, "The 1980 and 1984 U. S. Elections and the New Deal : An Alternative Interpretation, "April 1985.
- DP6 Haroutune K. Armenian, "Epidemiology and the War in Lebanon, "April 1985.
- DP7 Guillermo Soberon, "The Health System of Mexico : Before and After the Earthquake, " November 1985.
- DP8 Klaus M. Leisinger, "Rational Use of Pharmaceuticals in the Third World, "March 1986.
- DP9 Tobacco and Health : International Issues in Trade and Policy, July 1988.
- Gregory connolly, "International Marketing Activities of Tobacco Manufacturers"
- Ted Chen, "The Impact of U. S. Trade Policy on Tobacco Marketing and Consumption in Taiwan"
- Michael R. Reich, "Tobacco Production and Export Policies in the Third World"
- Thomas C. Schelling, Discussant

## Symposia Proceedings

Health Policy Towards the 21st Century : Health Problems Beyond the National Boundary, Michael R. Reich, ed. Boston : Harvard School of Public Health, 1985. Japanese publication by Kodansha. (Proceedings of First Takemi Symposium on International Health;Tokyo, Japan, May 1984. )

Health, Nutrition, and Economic Adjustment : Approaches to Policy in the Third World, Daved E. Bell and Michael R. Reich, eds. Dover, MA : Auburn House Publishing Co., 1988. (Proceedings of Second Takemi Symposium on International Health : Boston, MA, May 1986. )

### ●予告

### 武見記念論文集・資料集についてのご案内

公益信託武見記念生存科学研究基金では、  
武見記念論文・文集出版の準備を進めてまい  
りましたが、この度、武見資料集と共に丸善  
(株)より、年内に出版されるということで話が

まとまりました。

出版に先だち、予約注文を受けつけます。  
詳細は追ってお知らせしますが、維持会員の  
皆様には特別価格にて頒布いたします。

— 編 集 後 記 —

7月号は、第3回武見国際シンポジウムの開催直後に発行することになりますので、シンポジウムの予告でもなく、記事も載せられませんでした。9月号で特集を組む予定です。大来先生から早々と巻頭言の原稿を頂いていますが、武見シンポとの関係で9月号に廻させていただきます。

研究所では、実践的フィールド・ワークを伴う地域医療の協同研究が計画されていま

すし、保健・医療にかかわる経済分析の大掛かりな研究も準備されています。基金では、既に幾つもの研究分科会が発足し、活発な活動を開始しました。ご参加下さる方々の熱い情熱の結集によるものであります。一方編集子は、組織替え、新しいプロジェクトの開始等々への対応に追われているささか混乱さみです。ご容赦ください。(N)

# ヒューマンサイエンス

科学座標の平行移動が始まった!

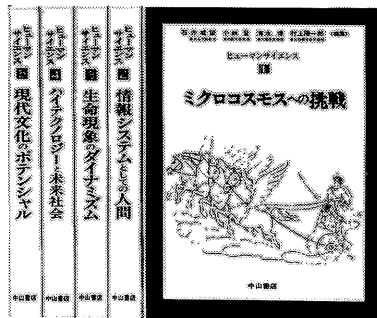
— 待望のニューパラダイム

全5巻 好評発売中!

東大工学部教授 石井威望 国立小児病院長 小林 登 東大薬学部教授 清水 博 東大教養学部助教授 村上陽一郎 <編著>

- ① 寺本英・山口昌哉・渡辺慧他著 情報的世界観と人間、ホロンとしての人間、生命と過程、物質の科学・生命の科学、他 2100円
- ② 井上和子・香原志勢・佐伯胖他著 高等動物のコミュニケーション、コンピュータビジョン、知識工学と診断システム、他 2100円
- ③ 江口吾朗・大沢文夫・日高敏隆他著 細胞レベルにおける生命、生体とゆらぎ、体の形はどのように決まるか、生命と寿命、他 2400円
- ④ 加藤秀俊・中村桂子・元岡達他著 情報革命と産業社会、第五世代コンピュータのめざすもの、遺伝子工学とバイオサエティ、他 2200円
- ⑤ 大島清・東野芳明・森政弘他著 遺伝子と文化の相互進化、科学と宗教、サルノの性・ヒトの性、科学と芸術の対話、他 2200円

各A5判 本文9ポ縦組み平均300ページ 美麗カバー付 上製



■詳細内容見本送呈

## 進歩から幸福へ

ヒューマンサイエンス・シンポジウム全録

- 第1部 現代人は何を、何を失っているか  
 第2部 科学技術の光と影—進歩と幸福のはざままで  
 第3部 いま、なぜヒューマンサイエンスなのか

河合隼雄・小林登・加藤秀俊〔討論〕／小此木啓吾〔司会〕  
 柳田邦男・石井威望・中村桂子〔討論〕／村上陽一郎〔司会〕  
 井上ひさし・清水博・日高敏隆〔討論〕／下河辺淳〔司会〕  
 A5判 本文230ページ 写・図152葉 ソフトカバー 1000円

〒113 東京都文京区白山1-25-14 ☎(03)813-1101(代)

中山書店